

淡路市人権教育研究協議会 定期総会 開催

5月23日(木)市役所2号館3階大会議室において、淡路市人権教育研究協議会の定期総会を開催しました。市内の各種団体、行政、学校から選任された代議員が集まり、今年度の役員承認、事業計画及び予算等を確認しました。

今年度の事業として、「2019じんけん市民講座」「第15回人権を考える集い」「人権シネマの集い」を計画しています。また、淡路地区研究大会(南あわじ市)、県中央大会(豊岡市)、全国大会(三重県)にも積極的に参加していきます。

文集「こころ」、人権広報「まるごとじんけん」、研究・啓発(人権尊重ポスター・標語募集)、学校教育代表者委員会(学校人権教育の推進)と、それぞれの委員会で市民の視点から分かりやすく共感が得られるように紙面づくりに努めていきます。

教育実践活動の重点目標

- I 市内学校・保育園(所)・認定こども園との連携を深め、子どもたちの自尊感情を育て、多様性を尊重する考え方や、社会で自立できる力をつけ、人権文化の創造をめざす実践の交流を図る。
- II 地域コミュニティや各種団体の特性を生かした主体的な活動を支援するとともに、人権のまちづくりを進める。

役員紹介

会長 山添 繁 (一宮支部長)
副会長 上原 孝 (津名支部長)
 栗山 信雄 (東浦支部長)
 坂惠 靖 (岩屋支部長)
 正和 (北淡支部長)

語り継ぐことの大切さ

私が最近読んだ『続昭和の怪物七つの謎』(保坂正康

著)という本の中に、次のような文章が掲載されています。「昭和という時代が『同時代史』から『歴史』に移行して行く時、これまでの解釈や見方が変わることは充分にありうる。たとえば『同時代史』の中では、戦争反対の意味は皮膚感覚になつてい

るが、『歴史』の視点で見ると、その皮膚感覚は想像力に移っていく。従って創造力が欠如していたり、知識として戦争の本質を見抜けない者は、実にあっさり武力行使を容認してしまう。」

この指摘は、私がかつて広島への修学旅行の際に、ある被爆者が語られた「忘れるから平和でない。私が語ったことを忘れないでほしい。」という言葉と重なりました。太平

洋戦争の敗戦から74年が経過し、悲惨な戦争を体験した多くの人が亡くなつている今日、この2人の方が鳴らされている警鐘をしっかりと刻まなければなりません。なぜなら、戦争は最大の人権侵害を生み出すからです。

人々が語ったことを記録し、歴史の検証に生かすという「オーラルヒストリー」という言葉をご存知でしょうか。例えば、生前の被爆者から聞きとった内容を、語り継ぐ活動などがそれに当たります。過去の単なる歴史とするのではなく、一人ひとりの生身の人間の生きざまを通して、戦争を知らない世代に伝えていくことが、戦争を風化させず平和を維持していくことにつながるからです。

かつての部落解放運動についても、『同時代史』から『歴史』に移行しようとしています。

す。「もう差別はない」という声も聞かれますが、顔が見えないネット上では差別が拡散しています。見えないものを見ようとしないと見えません。皮膚感覚を研ぎ澄まさないとならば、学が必要があるし、自らの差別意識とどう向き合うかが問われていと思います。

誰もが、差別の加害者にも被害者にもならず、困ったときは「助けて」と声に出せる、寛容で温かみのある淡路市を目指し、これからも淡路市人権教育研究協議会は、確かな歩みをつけていきます。

山添 繁

